報 告

経絡敏感者における耳針穴の経絡現象について (その1)

北 出 利 勝* 森 川 和 宥 神 野 英 明
田 中 淳 子 兵 頭 正 義

要旨 耳針療法は、耳介上に反応点を探して、刺針刺激を与え、疾病を治療する方法である。

経絡敏感者というべき著明な経絡現象を現わす患者の耳針穴に低周波鋲針刺激を与えた。耳針穴の一部分の点において、経絡現象が認められた。

58歳(主婦)の左耳針穴(210穴)に対して、通電装置により探索かつ刺激した。その結果、耳針穴に鋲針刺激をして、針の響きがあったのは約30%であった。耳針穴の主治作用と針響部位が一致した耳針穴は、「抜歯麻酔点」など4.3%であった。耳針穴刺激により、つぎのような訴えがあった。頭・眼が軽くなった。さわやかな気分になった。

I はじめに

耳針療法は、耳介上に反応点を探して、刺針刺激を与え、疾病を治療する方法である。

1957年、P. Nogier (フランス)は耳針療法について論文を報告した。その後、中国でも追試、実践がくり返され、ハリ麻酔としても耳針穴を用いている。また、一方で古典の文献を掘り起こし、耳針穴の理論が集大成されたようである。

われわれは、経絡敏感者というべき著明な経絡現象を現わす患者の耳針穴に低周波鋲針刺激を与えた。そうしたところ、耳針穴の一部分ではあるが、身体各部に経絡現象が認められたので報告

する。

II 調査方法

1) 対象患者

患者(被験者)は58歳の主婦で、神経質である。とくに自分の疾病に対する関心が非常に強いことが、心理的テスト(CMIテスト、矢田部ギルフォード性格検査、MD検査法、MASテスト)で伺うことができる。大阪医大麻酔科ペインクリニックで針灸治療を受けている。針治療に対する反応は非常に敏感で、治療効果も高かった(表1)。

2) 耳針穴と刺激部位

耳針穴は、耳介表面、背面をあわせて200穴以上存在する。耳針穴は子宮内で胎児がさかさまにおさまっているかのような(頭部を下にし、臀部を上においた)状態で分布し、耳針穴とそれぞれの部位を対応することができる。

刺激部位は、左耳針穴で耳輪、耳垂、三角窩、舟状窩など約17の部分に分けて刺激した。

耳針穴は、「針灸学¹⁾」の耳穴参考図、および「頭針と耳針²⁾」の耳介穴位の分布図を参考にした。

*Toshikatsu KITADE 大阪医科大学麻酔科ペインクリニック、明治鍼灸大学東洋医学教室

共同研究者: Kazuhiro MORIKAWA, Hideaki JINNO, Atsuko TANAKA, Masayoshi HYODO 大阪医科大学麻酔科ペインクリニック

Key Words: 耳針穴、針響、経絡敏感者、経絡現象、低周波鋲針刺激法

表 1 症 例	
経 絡 敏 感 者	57歳，主婦，H.S.
初 診 日	：昭和44年 6 月21日
病 名	：外傷性頸部症候群
初診時の主訴	：頭痛，肩こり，下肢脱力感。
現 病 歴	：昭和40年10月，柱で頭頂部を打撲。 1 週間後より四肢しびれ感，舌のもつれが始まる。その後，眩暈，下肢脱力，肩こり，四肢冷感などの不定愁訴を訴え現在にいたる。
既 往 歴	： 昭和38年 心臓弁膜症と某病院で診断される。 昭和50年 バルトリン腺腫瘍の手術を某病院・婦人科で受ける。 昭和54年 胃潰瘍の摘出手術を某府立成人病センターで受ける。

図 1 耳電針器 DJ-3 による耳針穴の探索と刺激方法

3) 調査方法

耳針穴は，上海医療器械店で製作された耳電針器 DJ-3 (耳電気探索器) で探索し，同器で刺激した。

刺激量は，被験者に電氣的痛みを与えない通電量で，低周波鋸針刺激を行った (sin wave, 0 ～ 18V)。刺激時間は，一つの耳針穴について10秒を

超えないものとした (図 1)。

針響があった場合，被験者が口頭および指で示した響きを水性マーカーでペイント，あるいは頭部や顔面部ではネットをかぶせて表わし，写真撮影を行った。

調査期間は，昭和57年 7 月より昭和58年 5 月までで，週 1 回の割合で約 1 時間行った (延30時間)。

Ⅲ 結 果

- 1) 耳針穴の主治作用と針響部位が一致した耳針穴
- 「抜歯麻醉点 2」「気管支」「外耳」「扁桃体 4」「内耳」「尿道」「喘息」「輪 4」「中枢」であった。
- ①抜歯麻醉点 2 (解剖部位：耳垂，主治作用：抜歯時麻醉，歯痛)
- 左中耳より左下顎部まで幅をもって響いた。
- ②気管支
- 中耳を奥へ入り，側頸部から咽頭部へ響いた。
- ③外耳
- 刺激部位から眼窩部へ響いた。また耳介前上方に扇形で響いた。頭がうずくような感じがした。
- ④扁桃体 4
- 側頸部に円形で響いた。
- ⑤内耳
- 外耳孔より内耳へ入り，頭頂部へ響いた。耳の中が痒くなった。
- ⑥尿道の点 (部位：耳輪，作用：尿路感染症，排尿困難)
- 刺激部位から，前頸部を通り天突へ行き，飛んで，臍中穴外方 1 寸より腹部腎経を下り，臍の下方から再び飛んで，大腿内側部 (血海)，下腿内側 (脾経) を通り，母趾内側 (隠白) までの，長い範囲で線状に響いた。
- ⑦喘息
- 刺激部位から耳輪に響き，内耳に入り，下顎の奥 (咽頭部) より，喉頭へ響いた。
- ⑧輪 4
- まず，耳介および耳介周囲に響き，中耳より咽頭部に響いた。
- ⑨中枢
- 刺激すると，強い頭痛を訴え，耳介後方を線

図2 下顎(2区)＜耳垂＞における経絡現象

状で頭の中までくい込んでくるような感じがした。

2) 頭部へ針響があった耳針穴

「輪1」「輪2」「腕」などであった。

①輪1

刺激部より後頭部へ広い範囲で響いた。

②輪2

耳介上方より線状で、頭頂部へ響いた。

③腕の点(部位：舟状窩、作用：手根痛と機能障害)

刺激部より、側頭部全体に響いた。

3) 頸部へ針響があった耳針穴

「眼」「肝炎点」など11穴であった。

①眼

耳介の周りをまわって、中耳に入り咽頭部へ響いた。

②肝炎点

刺激部位より、頭の中心に向かって1本の筋になって感じる。

耳介下方より咽頭部へ、細い線状で響いた。

4) 頭部と頸部に針響があった耳針穴

「子宮」「外生殖器」など6穴であった。

①子宮

耳介前上方に響き、また後頸部から後頭部に

かけて響いた。重たい感じがする。

②外生殖器

外耳孔より咽頭部へ響き、耳介後方より後頭部へ響いた。左側腹部、下肢外側が楽になった。

5) 頸部と上腕部に針響があった耳針穴

①大腸

外耳孔から咽頭部を通り喉頭部へ響き、飛んで肩関節前面より肘関節の少海まで響いた。反対側の肩関節前面も響き(ジワーとした感じ)があった。

②腎

大腸穴刺激とほぼ同じように、外耳孔から咽頭部、喉頭部へ、飛んで肩関節前面より少海まで響いた。

6) 頸と上腕と前腕と手指に針響があった耳針穴「下顎」「上顎」であった。

①下顎の点(部位：耳垂3区、作用：歯痛、顎関節症、口内炎、抜歯時の針麻酔)

耳介後方から後頸部、肩先を通して前腕尺側へ行き、第4、5指へ帯状に響いた(図2)。

②上顎(3区)

中耳より咽頭部に行き、肩関節部より上肢全体に響いた。

頭が軽くなり、左半身・左眼が軽くなった。

図3 上背〈耳背〉の点に刺激すると、つぎのように針響があった
 頭頂部←耳介上方←上背→耳介下部
 →肩峰→大腸経→商陽穴
 →腋窩→側腹→下肢外側→足の竅陰

7) ほぼ全身にわたり響いた耳針穴

「上背」穴であった。

○上背（部位：耳背部の耳甲介の隆起の下縁，
 作用：腰部捻挫，腰痛）

響きは、まず耳介上方より頭頂部へ行き、耳介下部より側頸部を通り、一方は肩関節より大腸経を下方へ、示指末端まで行った。もう一方は肩関節より飛んで、腋窩へ行き体側を通り、大腿外側・下腿外側を通り、第4趾（竅陰）まで響いた（図3）。

IV 考 察

以上の結果から、次のようなことが考えられる。一般のヒトにいくら耳針穴に針刺激をしても、経絡現象は起こらない。経絡敏感者においてこそ、このような針響が出現した。丸山、富田の調査においても同様な針響が見られた。

同患者において、軀幹および四肢に経絡現象が出現したのは、耳針穴の約30%である。また出現しなかったのは約10%である。

このことから、耳針穴の成立過程を推定するに、

たとえば10例のうち1例でも反応があれば、耳針穴名を付けて acupuncture map を作成していったのであろう。したがって、全面的にそのまま、耳針穴の治療効果を鵜呑みにできないといった方がごく自然であろう。

本症例における針響時の被験者は、じわじわとしみる様な、重い感じとか、全身的にすずしい感じなどを訴えた。

耳針穴の穴名通りに、遠隔部の四肢または臓器あたりに経絡現象があったことから耳針穴の治療効果はある程度認めることができる。

わずか1例のリサーチであるので経絡敏感者について、より多数例での克明な調査検討が必要である。また、より客観的な方法により調査する必要がある。

V 結 語

1) 経絡敏感者（58歳、主婦）において、針響からみて耳針穴の存在意義と治療的意義（頭・眼が軽くなった、さわやかな気分になった、下肢が軽くなった）が一部分認められた。

2) 耳介前面(160穴)および耳背(50穴)を調査したが、わずかでも針響があったのは29.5%(62/210穴)であった。

3) 経穴名のところへ針響があった穴数は、4.3%(9/210穴)であった。

4) 耳針穴名及び主治作用となんら関係のない部位に針響があった穴数は、25.2%(53/210穴)であった。

引用文献

- 1) 井垣清明ほか訳：針灸学，刊々堂（1977）。
- 2) 杉充胤編訳：頭針と耳針，自然社（1975）。

〒569 大阪府高槻市大学町2-7
大阪医大麻酔科ペインクリニック，
〒629-03 京都府船井郡日吉町
明治鍼灸大学東洋医学教室）

The Meridian Phenomenon Induced by Ear Acupuncture in a Meridiansensitive Patient. (Part I)

Toshikatsu Kitade, Kazuhiro Morikawa, Hideaki Jinno, Atsuko Tanaka
and Masayoshi Hyodo, M. D.

Pain Clinic, Department of Anesthesiology, Osaka Medical College

Summary

In order to investigate the meridian phenomenon elicited by the stimulation on auricular acupuncture point, a patient, 58-year old, in whom marked meridian phenomena are observed on the body was selected as a subject.

The stimuli were given by means of a low frequency electrical stick method on the 210 auricular-points of the left ear.

The echo sensation to the remote district from the auriculo-points stimulated was observed in about 30% of the total points.

In 4.3%, the site to which echo sensation reached corresponded to the response organ that is expressed in the name of point. A point named "anesthetic point for tooth extraction" was one of the representatives.

The comfortable feeling over head, eyes, and whole body was also observed when stimulation was given to these points.